

リズムの教育

小林 宗 作

近來リズムといふ言葉は、あたかも一種の流行語の如く、様々な人達から、様々な使用されてゐる、心理學者も、教育者も、藝術家も、將又經濟學者からも、といふ様に。

それはもとより甚だ結構な事である、思慮ある人々の言葉は、常に吾々を啓發して呉れるものであるから。

而し今此の稿を起すに當り、私の机上には、音樂の理論、作曲學、音樂教授法、體育舞蹈、遊戲、美學、藝術學、舞蹈、經濟學等、合計四十冊ばかりの書籍が積まれてゐる、私は此等の著書の中にあるリズムに關する項を悉く讀破して見たのであるが、リズムとは如何なるものか、明確なる理解を得るのに甚だ困難するのである。

「經濟學が勞働能率の研究の結果、リズムを問題とする様になつた」と云ふ様な程度でよいのなら、凡そ是位の概念的なものでも差支はないであらうが、藝術の研究に關するリズムの研究としては全く不充分であると思ふ。リズムに對する生得的本能が開拓して來た以外に、どれ程の功獻をなし得たであらう

か、私は疑問に思ふ。鐵道の線路工夫が、ツルッパシをふりながらふし面白く唄ふ。あのリズムや、ちかみさん達が綱の端を引つぱりながら唄ふ地ヅキ唄のリズム等は、所謂學者や藝術家達が氣の付かなかつた以前からの存在物であつて、學者が指導したのでもなければ、藝術家が創作したのでもないのである。

概念的な説明としては、立派な言葉が二、三ないでもないが、それ等の説明は、吾々に宇宙にリズムといふ物があるといふ事や、リズムが大切であるといふ様な事は明かして呉れるが、吾々のリズム感をどれ程まで醒し、發達させたであらうか、又リズムミカルな教育を豫想した或種の教育が果して豫期の効果を見るであらうか、少しは反省して見る必要はないだらうか、美しい言葉のミカや活字のミカから覺めなくてはならない、(近代人は言葉や活字に頼り過ぎて來た爲に感能が退歩した、吾々は自然が呼びかけて來る事實に最正しく速かに感應する處の感能の復活を企てなくてはならない、自然は豫告なしに横つらをはる、とは誠にうがち得たる戒告である)

リズムとは如何なるものか——或る音樂教授は「音樂から音を除いて残つたものがリズムである」と語られた事があつた、全くそれに違ひない。音樂は音とリズムの結合であるから、とりもなほさず、

$1(\text{音}) + 1(\text{リズム}) = 2(\text{音樂})$ $2(\text{音樂}) - 1(\text{音}) = 1(\text{リズム})$ といふのと同じである。之位の説明が藝術を發達させる助となるであらうか、又リズム感を醒すであらうか。吾々が今知り度いのは、残つたリズムなる一は

0.1+0.9=なのか、0.2×5=なのか、0.2+0.6+0.2=なのか、と云ふ様な種々相なのであつて、一なるものを分析して見なければ少数の世界は全くわからないと同様、リズムなるものを、分析して見なければ、其の相はわからないのではあるまいか、リズムと人生と云ふ著書は凡三百頁程も此問題を説いてゐながら、尙ほ且つリズムの一断面をも明かしてくれない。

ペンニントン(米人)は或る著書の中で「且つて世界の多くの科學者が長い間、リズムの研究をしてゐるが、未だ完全に定義せるものは一人もないのである」と云ふてゐる。吾々が非常なる敬意を以つて頼りにしてゐる處の學者達にして未だ説明が出来ないのであつた。此時、たま／＼ダルクロイツ氏の出現あり、こゝに一道の光明をもたらす事とはなつた。ダルクロイツの説明に従へば、從來多くの人達のリズムと稱してゐるものをリズムとミーターとに分折してゐる。そしてミーターはタイムの測定であり、リズムは平等と不平等の統一である。ミーターは運動とアクセントの測定であり、リズムは運動とアクセントの對照であると、そして之を混同してゐるが故にリズム藝術が發達しないのだと教へてゐる、進行曲に合せて歩行する場合、進行曲は様々なリズムの變化に富んだ音樂であつても、歩行者は悉く四分音符で平等に歩くであらう。又低學年の唱歌教授でよく行はれる様に手を打ちながら唱歌を唄はせる事があるが、八分音符であつても、或は十六分音符があつても又附點音であつても又休止符であつてさへも悉く四分音符で打つと云ふ様な事は、多くの教育者達が體驗せらるゝ事と思ふ。此の歩行や、拍手の

作用はミーターの現はれであつてリズムとは違ふのである。四分音符の並行（或は小節の變り目毎に現はるゝアクセント、即ち、四拍子に於ては四拍毎に、二拍子は二拍毎にと云ふ様にアクセントの並行）に依つて現はされた、ミーターの中に於て八分音符や二分音符、十六分音符や附點音符、休止符等、様々な變化を起さしめ、流して行く處の或る力がリズムなのである。

ツルベの桶は、反對側に桶がある事に依つて、他方の桶の位置が安定であつたり、不安定であつたり（即ち運動）するのであつて、若し反對側に桶がなければ、他方の桶は直に奈落の底に落込んで再び浮ぶ望は絶對にないのである。詮ずる處反對側の桶に依つて運動の可能性があるのである、此の事實は對照の説明になるであらう。（小村）

石井漢氏は「リズムは物の運動の中に流れてゐる力の呼吸である」と教へて居られる。たいそう良い言葉だと思ふ、特に呼吸と云ふ言葉に共鳴を感じる。

吾々肉體の持つ肺臓の呼吸運動は無意識に働いてゐるが、而し吾々が意志に依つて支配しやうとすれば、或程度までは意志に従ふものである、吾々は早く或は遅く或は強く弱く深く淺くといふ様に意志の自由にする事が出来るものであつて、休止しやうと思へば、或時間停止する事さへも出来るのである。此處で大切な事は無意識的、生理的作用である處の呼吸は吾々のリズム感を醒しませなければ發達もさせないものであつて、意志に依つて統御する事に依つてのみ、醒され發達されるものである、といふ事

である。(此呼吸の問題と石井氏の曰ふ力の呼吸との結合は後に述べることにする)

吾々日常の行爲は悉く魂の流れである。意志の表はれてない行爲といふものは無いのである。リヅミカルな行爲は、リヅミカルな魂、リヅミカルな意志無くして出来るものではないのである。従而リヅミカルな人間を豫想する處の教育は魂を醒し發達せしむる爲の方法を講ぜなければならぬ。

従來此の目的の爲に様々な方法が試みられてゐたのであるが、其の多くが目的に於ては完全であつても、方法に於て、又方法の構成に於て缺くる處なしとは曰へないのである。

リトミックの創始者ダルクローツ氏は此の目的の爲に未だ且つて試られた事のない特殊な訓練法を創案せられたのである。

リヅムは調和をもたらずのものである。……リヅムは、あらゆる動的藝術の母であるとか、平等と不平等の統一であるとか、多様の統一とか、秩序ある變化とか、自由の中に抑制あり抑制の中に自由ありとか、様々な人達から様々な理論付られてゐるが之等の言葉は悉く調和といふ事に密接な關係を持つものである、否調和其物だとも云へる。

故に魂の流れがリヅミカルであるといふ事は即ち調和的人格者であると云ふ事が出来ると云ふ事が想像出来るのである。而も現代は特に調和の教育が必要な時代である、何故かといふに、現代の如く主智的教育の影響に深く浸潤せられた時代の人間は、傳說的、奇蹟的、豫言的、既成宗教を素直に信仰する

事は甚だ困難であらうと思はれる。道德にしても舊道德をそのまゝ現代の青年は受入れまいし、又現代の青年達の吸引力を有する有力なる新道德が生れさうにも思はれない。詮ずる處宗教も、道德も現代人を支配統御する處の力を失ふたものと考へる事が出来る。而も世界は年々歳々、制限なく膨大して行くのである。私はやがて来るべき時代の、不統一な不調和な亂世を豫感して身ぶるひをさへ感ずるのである。此の亂世に調和をもたし統制をもたすものは何であらうか、此れは特に現代人に負はされた最大なる協同的課題であらう。

私はかく考へるが故に調和をもたらしべき教育は、現代教育の凡ての課程中甚だ重要な意義を持つものと考へるのである。

リズムの教育——は音楽を通して行ふを最も適當とする。音楽は吾々の心に最も感動を與へるものであるし、又音楽がリズムの多様性を最もよく表現してゐるからである。

又リズムの教育は身體運動を通して行ふを最も適當とする、吾々の身體は、身體自身がリズムの本義的要素を本能的に具有してゐるからである。即ち

(一) 心臓の規則らしい鼓動に依つてタイムの感念を與へられる、而しこの心臓の活動は吾々の意志とは關係なく活動してゐるものであるから、リズムの實行及知覺の爲には價値のない物である。

(二) 肺臓の呼吸運動はタイムを正しく分割してゐるからしてミトター(測定)のモデルとすることが出來

る。呼吸筋肉は、吾々の意志に依つて支配する事が出来るから、此れをリヅミカルに働かす事が出来る。

(三) 歩行、規則正しい歩行は拍子の完全なるモデルとなすことが出来る、運動筋肉は意志的筋肉である、絶対に意志の支配を受けるものであるから、子供をリヅムに導く最も自然な出發點は歩行にあると云ふべきである。而し之は單なる出發點に過ぎない、何故ならば専ら歩行の役目をなす處の脚部は意志的筋肉の或一部分に過ぎないからである。リヅム意識を醒し發達せしむる爲には、意志の支配に依つて運動する處の、凡ての筋肉の協同作用を必要とするが故にリヅム感を創造する爲には、全身の訓練を必要とするのである。

リヅムはダイナミックスと同様、全々運動に基くものである。故に運動せる身體を考へる事なしにリヅムを考へる事は出来ない、然らば

運動とは如何なるものであらうか……即ち時間と空間と力との結合體である、といふ事が出来る。此の中何れが一つ缺けても運動は成り立たなくなるのである。

運動に於ける時間と空間と筋肉エネルギー即ち力との相互關係は次の様である。

動力 + 空間 = 時間

時間 + 動力 = 空間

空間 + 時間 = 動力

即ち筋肉の力と一定の時間とが決定すれば其運動に要する時間がわかることになる。筋肉の力と時間とが決定すれば空間量がわかる、空間の量と時間の量とが決定すれば之に調和せんが爲には身體運動を統御する事が出来なければならぬ、筋肉を動かす動力の加へ方を自由に支配する事が出来なければならぬ。もしその統御を誤らばたちまち次の如き誤りを生ずる事になる。

例へば電車を動かすのに、甲の停車場から乙の停車場まで x 哩の間を y 時間に運動すると假定する、直に必要な電力は計出される筈である。此場合其計出を誤る時は

一、電力が不足するとき、電車は豫定の時間に到着する事は出来ない。即ち延着する事になる。

二、電力が多過ぎる時は、電車は、早着になるか或は無停車通過といふ事になるであらう。

此の方則は身體運動の場合に於ても無視することは出来ない。のであるから、或運動を程よく調和する爲には、筋肉運動が弱かつたり、或は固過ぎたり、或は不注意であつたりしてはならない。石井漢氏の力の呼吸と云はるゝ處に照合して考へて見る事が出来やう。身體運動をリズムカルに正しく演行するためには豫備條件として動力、空間、時間に關する運動を完全に統御することを學ばねばならない、以上諸問題を略言すれば、

一、リズムは運動である。

二、リズムは本質的に身體的なものである。

三、凡ての運動が時間と空間と力を必要とする。

四、身體的手段の完成は知覺を明確にする。

五、時間に於ける運動の完成は音樂的リズム意識を確實にし。

六、空間に於ける運動の完成は、造型リズム意識を確實にする。

七、時間空間に於ける運動の完成は韻律運動（リトミック）に依つてのみ成し遂げられる。

音樂のリズム……音樂は音を通してのリズムの表現であるからして、吾々は音樂を聴くとき、音を通してリズムの諸相を感じる事が出来る、そればかりではない、音樂は實に前項の、時間と力と空間との相互關係を最も適當に吾々に示して呉れる。即ちピアノが一度ある樂曲を奏すれば、必ず或る速度を示す（モデラート、アンダンテ、アレグロ等の如く）又長短時間の様々なる組合せを示して呉れる。

又それと同時に或る力を示して呉れる、即ち、フォルテ、ピアノ、フォルテッシモ、ピアノッシモ、クレッシェンド或はデクレッシェンド等、又それと同時にアクセントの位置を示して呉れる。即ち二拍子であるか、三拍子、四拍子等、

即ち一度ピアノが鳴る時は同時に

一、時間に關する凡ての色合

二、力に關する凡ての色合

此の二つの問題を最も理想的に融合せる状態に於て吾々に示して呉れるものである。

そして是等の凡てのものは悉く最も正しく肉體運動に具體化する事が出来るものである。

即ち $\text{♩} + \text{♩} + \text{♩}$ の法定式の示す原則に基いて肉體運動はピアノの音の強さと速度に支配され統御され、或は強く、或は弱く、或は早く、遅く、或は大きく、小さく等具體化されるものである。

造型リズム……前述の法則に従つて音楽のリズムの肉體的具體化は、必然的に造型リズムを生む物である。即ち音楽につれて肉體が或る運動を繼續して行く時には、必然的に肉體のポーズの連續が起る。

此のポーズの連鎖はとりもなほさず造型リズム意識の現れなのである。従つて此の造型力を醒し發達せしむる爲の特殊なる練習を必要とするのであるが、頁に限りがあるので此處では其の説明は省略する。

以上述べ來つた、運動に關する法則及造型リズムに關する法則とに従つて考察する時に

一、時間を平等に區切つて進行

二、力の平均した運動

三、言葉の意味を表はす運動

等は共にリズム感を醒し發達させる爲には多くの人達が豫期してゐる程の効果があるかどうか、一應反省を要する事と思ふ。

音楽のリズムの肉體的反應……此處に桶に盛られた一杯の水があると假定する、此の水は誰か、ゆ

すぶると波を立てるであらう、大きくゆすぶると大波を、小さくそつとゆすぶると小波を。

音楽は吾々の耳を通して神経中樞なる吾々の感情をゆすぶるのである、音楽の演奏者が或感激を以つて演奏すれば其の感激は音楽となり耳を通して吾々の感情を直接ゆすぶるものである。此のゆすぶられる感情は直ちに肉體に反能せなければならぬ。此の肉體的反應力を獲得せんが爲には、吾々の肉體は様々な速度と強さに應じて振動する處の肉體リズム感を創造せなければならぬ。結論すれば

一、感性を醒す事……或る音楽を聞いた場合聴者が演奏者の感激に共鳴し共感するためには感性の發達を要するものである。

二、媒質としての身體諸機關、演奏せる音楽が耳を通して神経中樞に、神経中樞から運動神経を通して各種の運動筋肉に傳達される迄の過程を媒質として完全ならしむること。

三、肉體的リズム感の創造。

以上の三項目の完成を目的として特殊なる訓練を行はなければならぬ。(未完)

附記——此論文は次號に於て完結する豫定であるが此の論文の具體化されたものが即ちリトミックで

あつて其特殊なる訓練法、即ち韻律運動法

◇音楽のリズムを肉體運動に具體化する法
メロデー
ハーモニー

◇運動の勢和力を音楽に具體化する法

◇造型力★ 造型リズム意識を醒す法

◇ダルクローツ式、讀譜練習法及基練習法

等の講習が開かれる事になつてゐる。

此の論文に或る興味を持たるゝ方々の御研究を希望する、山田耕作先生は此リトミックの何であるかを知らるゝ事は諸君を全く豫想もされなかつた美と眞の世界に導き、諸君をして、眞の音樂の心、舞踊の心を最も明瞭に知るの絶大なる歡喜を得るの因となるであらうと宣言して居られる。

ダルクローツ式リトミック

リズム運動法
聴管ノ開發法
ピアノ即奏法

講習會

期 日 八月一日ヨリ七日マデ 午前八時ヨリ午後四時マデ

會 場 成城小學校 東京府北多摩郡千歳村(新宿ヨリ二十分)
小田原急行線(新宿驛八番線)成城學園前下車

會 費 金五 圓

申 込 至急、住所氏名職名記入會費を添へ申込む事

寄 宿 最家庭的成城學園寄宿舎を開放す、二食付壹圓參拾錢希望者は前以申込む事

主催 成城幼稚園内 韻律教育研究會